

初代 石野竜山(兵太郎)

文久元年(1861)生、昭和 11 年(1936)歿

初代 石野竜山は、中浜竜淵、垣内雲嶙に絵画を、八田逸山に陶画を学び、明治 16 年(1883)、金沢市内に大中小三つの錦窯を築き、職人 2 人を置いて陶画業を始めました。

竜山の作品には繊細緻密な人物、山水、花鳥が描かれ、その細描の技術は当代陶工の中で群を抜いていました。こうした作品は、国内の展覧会のみならず、サンフランシスコ万国博覧会などの海外の展覧会にも出品され、数々の入賞の実績を残したほど、優れたものでした。

竜山は、小松の松原新助窯のところで、素地と釉薬との相性をよく研究し、釉薬の技術力を高め、明治 35 年(1902)、上絵釉を用いて、釉下彩に等しい黄彩、緑彩、染付藍、茶褐釉、淡緑釉、桜色水裂釉、真珠釉などを次々に開発しました。それらの釉薬を用いて文様をより高尚なものに仕上げました。釉薬研究に大きな功績を残した名工でした。

[金沢九谷の陶画工](#)より

田村金星

明治 44 年 小田清山先生に師事して細字修業

大正 13 年 独立し開業

昭和 16 年 東久邇宮殿下献上品制作

昭和 19 年 技術保存者に認定される

昭和 23 年 芸術陶磁器認定委員会より第二部資格者に登録される

昭和 28 年 東京都及び東京都陶磁器協同組合主催の大展覧に招待され技術の公開をして感謝状を受ける

昭和 40 年 小松市無形文化財に認定される

昭和 51 年 石川県指定無形文化財九谷焼技術保存会々員に推薦される

[能美市大図鑑](#)より

田村敬星

九谷毛筆細字、陶窯田村三代目敬星さん。

祖父・金星さんに師事し、日本伝統工芸展など、多数の公募展に入賞。

魅力的な世界観を携えた色絵装飾と毛筆細字を組み合わせた技法を継承。

米国ワシントンスミソニアンサックラー美術館に作品が収蔵され、海外で毛筆細字の洗練された美しさが称賛されます。

平成十七年、石川県指定無形文化財九谷焼技術保存資格保持者に認定。

個展を中心に活動し、創意工夫と自己研鑽のもと、新しい九谷焼の可能性を追求。

[Japan Pottery Net](#) より

プロフィール

1969 年 祖父金星に師事 1983 年 日本工芸会正会員認定 1989 年 伝統九谷焼工芸展大賞

受賞 1991 年 一水会陶芸部展 一水会会員優賞・審査委員・委員推挙 1993 年「米国巡回記念 日本現代陶磁展」銀座和光ホール 1995 年「細字君が代茶盃」献上制作「清山・金星・敬星 細字三代展」能美市立九谷焼美術館 1998 年「九谷焼百年 パリ展」出品 2002 年「九谷細字 一世紀の歩み」ながの東急シェルシェ 2004 年 一水会陶芸部常任委員推挙 2005 年 石川県指定無形文化財九谷焼技術保存会会員認定 2006 年 伝統九谷焼工芸展鑑審査委員推挙 2007 年「九谷細字三代田村敬星展」日本橋三越本店 2012 年「一子相伝の技・田村敬星展」西武池袋本店アートフォーラム 2015 年「伝統の技・革新の美」西武渋谷展 2018 年「田村敬星半世紀展」天満屋福山店・岡山本店「第二回 日本工芸展 九谷焼 2018」景德鎮中国陶磁博物館・上海工芸美術博物館 2019 年「超絶の世界展」瀬戸内市立美術館 2020 年「田村敬星・星都展」日本橋三越本店 2022 年「田村敬星半世紀展」ながの東急シェルシェ

高田伝一郎

1904 年？月(明治 37 年)～1988 年 12 月(昭和 63 年 12 月)

略歴

九谷の陶芸家、歌人、日展を中心に活躍

[笠間竹雪](#)(市太郎)の門人で中嶋珠光、中島寿山、松本佐吉、高田伝一郎など後に名匠となったものが多くいました。

[能美市大図鑑](#)より

[陶歴](#)

中嶋珠光(中島珠光)

本名中嶋源雄 1911(明治 44)年 11 月 3 日九谷上絵師中嶋文作の第三子次男として生まれた。父は九谷庄三の採弟子に当たる職人だったが、長男秀雄(寿山)は上絵師を継ぐとしても次男源雄には他の仕事をさせたかったらしい。だが源雄は父の仕事や兄の修業を見てか執念のように絵筆を持ちたかった。陶画は初代武腰泰山や笠間竹雪に学んだ。手ほどきは泰山に、作品としては竹雪に学ぶことが多かったが、寺井野村が招いた県立工業学校の安達陶仙について系統的に基本から学習させられた。のち県立工業学校で日曜ごとに開講された専科に学んだ。同窓には松ヶ浦文四郎や北野範二・小西尚俊らがいる。のち乞われて北出塔次郎の北出窯に手伝いに行ったが、ここで仮寓して制作していた富本憲吉と出会う。富本憲吉が「精一杯いいものを作って安く売れ」といわれたことが脳裡に焼きついていていたという。戦時中の徴用や召集で空けた期間を除けば絵筆一本で歩んだ執念が実ったことになるが、珠光と号して作品を造るようになってからは徹底的に九谷の上絵に固執、大和絵風な日本画を陶磁器の大皿や花瓶等に彩画してきた。飛鳥・奈良時代の故事や天下の美術にあこがれ、その源流ともいわれる中国の古美術にも関心があって、1947(昭和 49 年文部大臣賞「天下を偲ぶ」)のような作品が生まれている。

若いころ火度の低い絵具を使ったころから彩の輝きは火度によって発色が大きく左右されることを痛感してきた。それは素地の肌を見ても焼きしめた火度が連想出来るまでに行く

度となく研究をつづけてきたことと相まって、「絵具を徹底的に焚き込む」作品づくりにつながっている。

繊細でありながら大膽な筆致で描かれ優雅な気品さえ感じさせる画風は独得の美しさを保っている。

[能美市大図鑑](#)より

[陶歴](#)